



国際ワークショップ

「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」 ～ COP10名古屋に向けて～



日 時 : 2010年5月13-14日
場 所 : 名古屋国際会議場・白鳥ホール
参加費 : 無 料
使用言語 : 英 語 (同時通訳あり)

プログラム

2010年5月13日(木) 9:30 受付開始

- 10:00-10:30 開会宣言, 来賓挨拶
- 10:30-12:00 講演1「生物多様性の危機—地先・地球レベルで」
講演2「生物多様性保全に向けた応用生態工学の挑戦」
- 12:00-13:00 昼休み
- 13:00-14:45 セッション テーマA「景観・生息場の保全」
- 14:45-15:15 休憩
- 15:15-17:00 セッション テーマB「水・物質フラックスネットワークの健全化」

2010年5月14日(金) 8:30 受付開始

- 9:00-10:45 セッション テーマC「都市の責任」
- 10:45-11:00 休憩
- 11:00-12:30 ケーススタディ (ポスター展示も含む)
- 12:30-13:30 昼休み
- 13:30-15:30 パネルディスカッション
- 15:30-16:00 休憩
- 16:00-16:30 総括 (応用生態工学からのアピールの採択)

主 催 : 「生物多様性保全に向けた応用生態工学からのアプローチ」国際ワークショップ実行委員会
共 催 : 応用生態工学会, 日本生態学会, (社)土木学会
後 援 : 国土交通省, 農林水産省, 愛知県, 名古屋市, (財)リバーフロント整備センター,
(財)ダム水源地環境整備センター, (財)河川環境管理財団, (社)淡水生物研究所,
(社)中部建設協会, 応用生態工学会名古屋, 名古屋大学名古屋流域圏水理研究院
連携協力 : 文部科学省科学技術振興調整費「伊勢湾流域圏の自然共生型環境管理技術開発」研究グループ,
生物多様性条約第10回締約国会議支援実行委員会
● 本国際ワークショップは, 一部 河川整備基金の助成を受けています.



ご案内

今年は、名古屋で生物多様性保全 COP10 が開催されます。会議では、生物多様性保全のための新しい目標設定をはじめ、さまざまな議論がされますが、COP10 名古屋では COP9(ボン)と同様、「都市と生物多様性」もひとつの焦点です。応用生態工学会では、科学的知見と技術を発展させ、流域の人間活動の中心としての都市の責任を果たすことが、「都市と生物多様性」を議論するポイントと考えています。昨年多彩な分野の研究者による講演とパネルディスカッションを主体とした「生物多様性と流域圏」をテーマに4回のフォーラムを開催(参照 <http://www.nhri.jp/event.htm>) するなど議論を重ね、COP10 に向けて、以下のようなアピールを名古屋から発信したいと考えています。その骨子を踏まえて、ここに本国際ワークショップを企画しました。応用生態工学会の会員の皆様のみならず、生物多様性の保全や再生に関わるさまざまな分野の研究者や実務者、行政の方々など多方面からのご参加をお待ちしております。

生物多様性保全に向けた応用生態工学会からのアピール(案)

散在する地先の「景観」(生息場)の保全、それを連結する水・物質フラックス網の健全化、それを実施する仕組(ガバナンス)あるいはそれを支える「都市の責任」の3つを軸としながら、生物多様性の保全に向けた行動を実践し、自然共生型流域圏をめざす。

地質・生物進化史的かつ生態学的に貴重な特徴を有し、人間活動の核となる都市を支えてきた伊勢湾流域圏をモデルとすると、ここで展開された人間活動は、生物多様性の損失をはじめとした生態系劣化をもたらした一方、都市に経済力・知識・技術を集積させたといえる。この地域において、生物多様性の保全を目指す景観保全、水・物質循環の健全化、都市の責任の行使という3つを軸とし、応用生態工学的アプローチに基づく自然共生型流域圏に向けた行動を実践、その成果を発信する。



国際ワークショップ実行組織

顧問 橘川 次郎 キーンズランド大学 名誉教授
近藤 徹 (財)水資源協会 理事長
山岸 哲 山階鳥類研究所 所長

実行委員会

委員長	辻本 哲郎	名古屋大学		
委員	池淵 周一	(財)河川環境管理財団	江崎 保男	兵庫県立大学
	菅場 祐一	(独)土木研究所自然共生研究センター	島谷 幸宏	九州大学
	清水 義彦	群馬大学	竹村公太郎	(財)リバーフロント整備センター
	谷田 一三	大阪府立大学	戸田 祐嗣	名古屋大学
	中村 太士	北海道大学	福田 晴耕	(社)中部建設協会
	藤田 光一	国土交通省国土技術政策総合研究所	森 誠一	岐阜経済大学
	森下 郁子	(社)淡水生物研究所	山本 晃一	(財)河川環境管理財団
	渡辺 和足	(財)ダム水源地環境整備センター		(敬称略,五十音順)

講演概要／講演者の紹介

われわれは、豊かな文化や安全、資源そして環境を確保するためにこの国土を改変してきたが、資源枯渇、地球温暖化や生物多様性の喪失などが顕在化し、持続性への脅威を実感するようになってきた。それを打破する術としての科学を生態学と工学の融合に見出そうとしているのが「応用生態工学」である。その集合体が、地先から地球規模までの生物多様性の危機をどう認識しているか、水生生物に焦点を当てても実感できる。また、こうした危機を軽減する方向性として、生息場の保全、水・物質フラックス網の健全化に焦点を当てるとともに、人の知恵・技術の集積した都市や知識人(学会)の責任としての行動をテーマにした。この行動の実践の場として「流域圏」に焦点をあて、ここでの取り組みを2つの講演に代表させた。

谷田 一三 氏：大阪府立大学大学院 教授

理学博士。1996年より大阪府立大学総合科学部教授、2005年より同大学大学院理学系研究科生物科学専攻教授。専門研究は、理学・生物学・生態。主な著書に「河川の水質と生態系—新しい河川環境創出に向けて—」(技報堂出版、共著)、「日本産水生昆虫 科・属・種への検索」(東海大学出版会、共著)等。



辻本 哲郎 氏：名古屋大学大学院 教授

1978年京都大学大学院博士課程修了。工学博士。京都大学助手、金沢大学工学部助教授を経て、1998年より名古屋大学大学院工学研究科社会基盤工学専攻教授。専門は、河川工学、土砂水理学。現在の主な研究テーマは、流域圏での自然共生型環境管理手法の開発。著書に「ダム下流生態系」(京大出版、共著)等。



セッションテーマA:「景観・生息場の保全 (Habitat Mosaic Restoration)」

河川生態系は、川の流れで形成される瀬淵構造や砂礫堆、網状流路、水際領域、屈曲部にできるよどみ、倒流木によって形成される複雑な生息場などの河川内景観要素と、洪水時に形成される氾濫原モザイクや後背湿地、自然堤防、三日月湖などの氾濫原景観要素によって構成されている。本セッションでは、こうした景観要素間のつながりや変動が河川に生息する水生動物や植物、生態系プロセスにいかなる影響を与えているかを明らかにし、過去の流域開発によって失われた景観要素とそのつながりを復元するための基本的な考え方を、米国ミズーリー川、ミシシッピ川と日本の河川の事例をもとに議論する。

David L. Galat 氏: ミズーリー大学 准教授

カーネル大学にて保全学を専攻、1982年コロラド州立大学にて水産野生生物分野で博士号を取得。専門は、大河川の生態学、魚類生態学、修復生態学。生息場、流量の確保が、在来魚等の生物を回復させることを示し、大河川の氾濫原生動物の回復・管理を研究している。



中村 太士 氏: 北海道大学大学院 教授

北海道大学大学院農学研究科修了。農学博士。1990年～1992年まで米国森林局北太平洋森林科学研究所に留学。2000年より北海道大学大学院農業研究科森林管理保全学講座教授。森林と川のとつながりを土地利用も含めて流域の視点から研究している。



セッションテーマB:「水・物質フラックスネットワークの健全化 (Flux Network Rehabilitation)」

流域圏の中に散在する様々な地先の生態系は、流域内での水・物質循環網(フラックス・ネットワーク)によって結びつけられながら、相互に関連しあっている。近年の人間の社会・経済的活動の増大は、資源やエネルギー需要を隣接する複数の流域に求め、様々な人工的施設を付加することにより、自然の水・物質循環網を改変し、生態系に影響を与えてきた。生物多様性の保全や環境修復を実践していく際には、したがって、こうした水・物質循環網の視点を持つことが不可欠である。その一方で、水・物質循環網のスケールは大きく、その全体像と各地先との関係を捉えることが難しいという課題がある。本セッションでは、流域内の各地先における生態系・生物多様性の変遷を把握し、生態系の修復を図っていく際に、なぜ、どの程度まで、そして、いかにして、流域圏における水・物質循環網の視点を組み込んでいくか?を明らかにすることを目的として、水循環の視点も取り込んで行われた米国キシミー川の環境再生プロジェクトと、水・物質循環網の枠組みに基づき統合的な環境管理技術を開発しようとしている日本の伊勢湾流域圏の事例を取り上げ、議論を深めていく。

John Lawrence Glenn 氏

: 南フロリダ水管理公社 キシミー区域ディレクター

1996年からフロリダ州のキシミー川自然再生事業に携わり、河道や氾濫原における魚類群集の構造変化や食物網におけるエネルギー変換について研究。2007年から現職。科学者、技術者のリーダーとして、約100km²に及ぶ、河川・氾濫原生動物の回復事業に従事。



藤田 光一 氏: 国土技術政策総合研究所

河川研究部流域管理研究官

東京工業大学大学院土木工学修士課程修了。工学博士。1983年建設省入省、土木研究所河川研究室長、国土交通省中部地方整備局三重工事事務所所長などを経て、2009年より現職。主に研究畑を歩き、河川工学を軸足に、川の暴れ方と川の恵みの両面を研究している。



セッションテーマC:「都市の責任 (Responsibility of Metropolitan)」

都市における過剰な水・物質・エネルギーの消費とその結果排出される様々な負荷は、流域圏における生物多様性の損失に繋がっている。一方、都市は流域圏における社会・経済の核、人材と技術が集積する場所であり、流域圏における生物多様性の保全に対する責任と能力を有している。本テーマでは、このような都市の特性を理解しながら、流域圏における水量、水質、物質を適切に管理し、都市域の負荷を軽減・制御し、流域圏における生物多様性を保全するためのガバナンスのあり方について議論する。

Walter Menzies 氏

: マージ川流域キャンペーン (MBC) 専務理事

1983年から北西イングランドにおけるグランドワーク活動でのディレクター等を歴任し、2000年より現職。MBCは、産業革命の頃から汚染されてきたマージ川流域の再生をめざし、行政・市民・企業が一体となり約25年間活動が続いている。



鈴木 公平 氏: 豊田市市長

平成4年豊田市助役に就任、平成12年に豊田市市長に就任、平成20年3期目を再任し、現在に至る。豊田市では、特に交通まちづくりと森づくりにおいて、都市特性を踏まえた環境施策を推進しており、2009年には「環境モデル都市」に国から選定されている。



募集

本国際ワークショップでは、流域圏での生物多様性保全に関わる取り組みを紹介するポスターを募集しています。ご希望の方は、【氏名・所属・発表タイトル・発表概要(100words程度、英語)】をE-mail (nhri@civil.nagoya-u.ac.jp) または、裏面の申込用紙にご記入いただき、FAXにて事務局へお送り下さい。当日は、A1版で作成いただいたポスターを会場までお持ち下さい。

なお、使用言語は英語となります。みなさまからのたくさんのご応募をお待ちしております。

* 採否は事務局に一任してください。

申込締切 4月28日(水) 17:00まで

会場案内

名古屋国際会議場・白鳥ホール
〒456-0036 名古屋市熱田区西町 1 - 1

● 交通アクセス ●

○ 名古屋駅から約20分

名古屋駅（地下鉄東山線）→ 栄駅 →
（地下鉄桜通線）→ 久屋大通駅 →
（地下鉄名城線）→ 西高蔵駅 →（徒歩5分）→会場

○ 中部国際空港（セントレア）から約40分

中部国際空港→（名鉄）→金山駅→（地下鉄名城線）→西高蔵駅→（徒歩5分）→会場



申し込み・問い合わせ先

名古屋大学大学院工学研究科
社会基盤工学専攻水工学講座

〒464-8603

名古屋市千種区不老町工学部 9 号館

TEL : 052-789-4626

E-mail : nhri@civil.nagoya-u.ac.jp

URL : <http://www.nhri.jp/>

参加ご希望の方は、下記の参加申込書に必要事項をご記入の上、FAX または E-mail にてお申込ください。

国際ワークショップ 参加申込書 申込締切 5月7日（金）

代表連絡先

E-mail : nhri@civil.nagoya-u.ac.jp FAX : 052-789-3727

ふりがな	-----		
氏名	所属先 名称		
住所			
E-mail アドレス			
TEL		FAX	

参加者氏名（所属）

参加者氏名	所属	参加者氏名	所属

ポスター発表申込書（英語で記入してください） 申込締切 4月28日（水）17:00まで

Name :	Affiliation :
E-mail :	TEL :
Title :	
Abstract (100 words) :	

お申込の際にご提供いただいた個人情報は、本セミナーの運営管理のみに使用します。